

## 第1章 先行研究

### 1. ベンデ, トングウェに関する言語学外の先行研究

#### 1.1. 歴史, 人類学の記述

歴史上, ベンデの名が登場する最初の文献は, Stanley (1872, 1878) のものである. Stanley (1872) の *How I found Livingston* 中の「ウカウエンディからウジジまで」という章に出てくる kawendi がおそらくベンデ・ランド(ベンデ語で *kábhendé*) を指している. その後, Becker (1887) は Karema に逗留した White Fathers と呼ばれるカトリックのミッションに関して記し, ベンデ人の生活にも触れている. 20 世紀初頭には, ドイツ人神父 Von P. Majerus とベルギー人神父 R.P. Avon がベンデの社会組織, 生活についての記述を残している (Majerus 1915/16, Avon 1915/16). 1920-30 年代のベンデ人の生活状況については, 県庁行政官助役 Assistant District Officer の Savoy (1933a, b) が報告書に詳細に記している.

民族学, 人類学の分野では Murdock (1959) が, アフリカの諸民族の一つとしてベンデに触れ, 分類を行っている. Murdock (1959) では, ベンデは Tanganyika Bantu の Nyamwezi クラスターのひとつとなっている. つまりベンデ・ランドの東に位置する Nyamwezi 系とされている.

その後, 現在の Mahale 国立公園でチンパンジーの調査をはじめた生物学者たちを中心として, その土地の自然環境のみならず, そこに住む人々, トングウェの記述が本格的に始められた. トングウェの歴史, 植物利用, 動物利用の記述は, 西田 (1973, 2002a, 2002b), 伊藤 (編) (2002) に詳しい. 西田 (1973) は特にトングウェの歴史, 生活についての最初の貴重な記録である. トングウェの民族誌的記述, 動物利用全般については, 伊谷 (1964, 1976a, 1976b, 1977a, 1977b, 1977c, 1980, 1984a, 1984b, 1990, 1991, 1996a, 1996b) が膨大な資料と分析結果を提示している. さらに掛谷 (1974, 1976, 1977a, 1977b, 1978, 1980, 1984a, 1984b, 1991, 1993, 1994a, 1994b, 1995) は人類学の立場から, トングウェの呪医世界を中心として, 生計維持機構などの詳細な記述, 分析を行った. 1976 年には, 掛谷, 西田によるトングウェ語彙集 *A Glossary of Sitongwe* も出版された (Kakeya and Nishida 1976). トングウェの当時の状況の記録は, 西田, 伊谷, 掛谷のみでなく, 日野 (1968: 375-380), 加納 (1977: 344-355) にも詳しく述べられており, 当時のトングウェへの関心の大きさがわかる. 近年のトングウェに関する情報は, 小川 (2002: 189-205), 金森 (2002: 241-255), 西田, 上原, 川中 (編) (2002) に詳しい.

Mahale 隊の業績の中で, 言語学の立場から特に注目すべきは, 詳細な動物名, 植物名の記述である. ほとんどの記述にトングウェ名がつけられており, 学術的に同定してある. 植物名の最新版は, 西田, 上原, 川中 (編) (2002) に, 動物名は伊谷 (1977c: 441-535) のリストに収められている.

## 第1章 先行研究

## 1.2. ベンデ、トングウェ社会の概略

ベンデを含むトングウェ社会については、膨大な先行研究があるので、ここでその詳細を述べることはしないが、言語記述に関与的ないくつかの特徴的な点を指摘する。伊谷(1977b)、掛谷(1977a, b)が記す概略によると、ベンデ、トングウェの生活環境は、乾燥疎開林と呼ばれる植生帯に属し、焼畑農耕・狩猟・漁労・蜂蜜採集などの生業を営む人々である。彼らの生活形態のうち特に注目に値するのは、1km<sup>2</sup>あたり0.73人という極めて低い人口密度と、戸数にして2-10戸、人口ではせいぜい5-40人という小集落が距離を隔てて広大な原野に点在する疎開した居住様式である(掛谷 1977a: 369)。主な生業は、農業であるが、湖岸のトングウェ・ランドではキャッサバ<sup>1</sup>が、内陸のベンデ・ランドではトウモロコシが主な作物であり、現金収入を得るための商品穀物でもある。ベンデ・ランドにおけるトウモロコシの利用は、言語にも影響を及ぼしており、トウモロコシに関する語彙の豊かさは目を引く。狩猟は、主な生業というわけではないが、ベンデ、トングウェの男のアイデンティティとなっている。彼らの狩猟の腕のよさは卓越しており、歌にも「真の狩人」のジャンルの *bhújéghé* なるものがあり、真の狩人 *mújéghé* は特別な力を持つ者として、祭祀を司ることもある。家畜は少なく、祭祀に用いられるヤギ、ヒツジ、ニワトリが多少飼われている程度である。ベンデ、トングウェ・ランドには、ツェツェバエが広く棲息するため、牧牛はほとんどない。Mwese村では1964年以降、RwandaからのTutsi難民によって牧牛が始められたが、それ以外の地域では牛を見ることはほとんどない。それを反映して、ベンデ語の牧畜に関する語彙は乏しい。

また、ベンデ、トングウェの民族的起源を知る上で重要なのは氏族である。序章 1.5.1. に示したように、ベンデ、トングウェには20前後の氏族があるが、ベンデ系の氏族とトングウェ系の氏族とがあり、ベンデ系の氏族はHaランドを出自とし、トングウェ系の氏族はTanganyika湖を渡ってきた現在のコンゴ民主共和国の民族を出自とする。彼らの氏族は、様々な禁忌、挨拶法などと結びついている。しかしベンデ系とトングウェ系の人々の言語に、基本的な違いはない。彼らの口承上の起源である諸民族の言語とベンデ語、トングウェ語は、直接的に結び付けられるわけではない。ベンデ語、トングウェ語の基層にHa語、あるいはトングウェ系の氏族が出自とするコンゴ民主共和国の民族の言語、Holoholo語、Bemba語、Taabwa語、Lungu語があるという根拠が明示的に証明されているわけではない。

## 2. ベンデ、トングウェに関する言語学的先行研究

ベンデ語、トングウェ語に関する本格的な言語学的記述はこれまでない。先行研究では、比較対照を目的とした基礎語彙の調査、分析、分類などは行われたことがあるため部分的な記述はあるが、ベンデ語全体を捉えようとする言語学的記述はない。これまでの調査結果は、Guthrie(1948, 1967-71)、Bryan(1959)、Gordon(2005)の *Ethnologue 15<sup>th</sup> edition*、Nurse and Philippson(1980)、Nurse(1988, 1999)に反映されている。以下、これらの先行研究の成果と分類を概説する。

## 2.1. Guthrie (1948, 1967-71)

Guthrie(1948: 46-48)はBantu諸語全体を地理的に15のゾーンに分け、各ゾーンにアルファベットを

<sup>1</sup> Savoy(1933a)によると、この地にキャッサバがもたらされたのは1920年代のことで、ベンデ、トングウェにとってはそれほど伝統的な作物ではない。

つけ、さらに近い言語には 10 番台, 20 番台…のように通し番号をつけている。同じゾーンの言語には共通する特徴が多いが、ゾーンは必ずしも系統関係を反映しているわけではない。Guthrie(1948)によればトングウェ語は F.11, ベンデ語は F.12 である。これは Bastin, Coupez and Mann(1999)にもそのまま受け継がれている。本章で取り上げるいずれの先行研究も、基本的に Guthrie(1948)の分類を踏襲している。Guthrie(1948: 46-48)は(1)の諸語を F ゾーンとした。F ゾーンは 3 つのグループに分けられ、同じグループの言語は互いにかなり近い関係にある。

## (1) F ゾーンの言語グループ

Group 10	Group 20	Group 30
11. TODGWE	21. SUKUMA	31. N[LAMBA
12. Bende	22. NWAMWES{	32. RIM{
	22a. NYANYEMBE	33. LADG{
	22b. Takama	34. Mbugwe
	22c. Kiya	
	22d. Mwerj	
	23. SUMBWA	
	24. KIMBU	
	25. BUNGU	

F ゾーンは、7 母音体系であること、母音の長短があること、語根の声調の区別があること、ある種の文法特徴、という特徴によって区別される。(2) は F ゾーンの 17 の特徴である。

## (2) F ゾーンの特徴(Guthrie 1948: 46-47)

1. 各言語は指大形, 指小形のクラスをもつ。
2. 名詞の孤立形には、重複接頭辞<sup>2</sup>がつくが、ほとんどの言語で限定的用法の場合のみである。
3. 各言語は、F.32(Rimi)を除いて、3 つの付加的独立接頭辞<sup>3</sup>をもつ。
4. たいてい名詞には ni- が前接し、文となる<sup>4</sup>。
5. 名詞接頭辞以外で li- をとる単数クラス<sup>5</sup>は、名詞接頭辞で j- をとる。
6. 接尾辞-jre ないし-jle はこのゾーンのすべての言語に現れる。
7. 「進行中の行為」を表す要素である-ag- ないし-gga は、この種以外の指示にも用いられる。
8. これらの言語のほとんどが、複雑かつアンバランスな時制の体系をもっている。
9. コピュラは E ゾーンとは違う方法で、時制を伴った形式で使われる。
10. ほとんどの言語に、純粋な否定時制がある。
11. F.32(Rimi)を除くこれらの言語には、特殊な子音交替はほとんどない。

<sup>2</sup> 本論で「重複接頭辞」にあたるのは、名詞の「二次クラス」および「冒頭母音」である。

<sup>3</sup> 本論では 16, 17, 18 クラス、または「場所クラス」と呼ぶ。

<sup>4</sup> 本論の ni は接辞でなく、独立の語「コピュラ」とする。

<sup>5</sup> 本論では 5 クラスとする。

## 第1章 先行研究

12. このゾーンの言語はすべて7母音体系である。
13. このゾーンを通じて、語根の母音には長短の区別がある。
14. これらの言語には、-a-, -iが他の母音と結びついた形が聞かれないという、一般的でない母音融合のタイプがある。
15. F.25 (Bungu)を除き、無声破裂音の前に鼻子音が来ても有声化による交替形は生じない。
16. F.33 (Langi)を除き、すべての言語で語彙的声調が用いられる。声調によって時制が区別される例が多い。
17. 動詞接頭辞はすべてが同じ声調の振る舞いをするわけではない。特に mu-(CL1SG), mi-, n-(SG)クラス<sup>6</sup>に呼応する動詞接頭辞は他から区別される。

ベンデ語は、大方、上記の特徴を有するが、10, 14番の特徴については、はっきりしない。また、ベンデ語は12番の特徴である7母音体系をすでに失っている。

一方、Guthrie (1967-71, vol.2: 47)は、ベンデ語については未調査としているが、(3)のようなトングウェ語の特徴を示している。

## (3) トングウェ語の特徴

## F.11 Tongwe

(A) [7V; 2Q]: \*C1: \*p>h[(\*~j, \*~y)>f]; \*b>β[(\*~j, \*~y)>f]; \*t[(\*~j)>s; (\*~y)>f]; \*d>[(\*~j)>s; (\*~y)>f]; \*k>k(\*~j)>s]; \*g>γ[(\*~j)>z; (\*~j)>s; (\*~y)>f]; \*c/\*nc>s/ns, \*nj>'s

Tones : Fully distinctive, but opaque

(B)(i) Cl.7 IP: sj Cl.8 IP: fj

(ii) Gend.11/10, 12/13(+dim)

(A)は音変化の規則、(B)は形態論的特徴を示す。(A)の7Vは7母音体系をあらわし、2Qは母音の長短が弁別的であることをあらわす。Guthrie (1967-71)のトングウェ語の記述中、7母音は以下のようにあらわされる<sup>7</sup>。

## (4) トングウェ語の母音 (1967-71, vol.2: 47)

i	y
e	o
ε	ɔ
a	

また Guthrie (1967-71)の vol.3, vol.4 には(5)に示すトングウェ語の語例がある。C.S.で示す識別番号、Bantu 祖語形 PB, 意味はいずれも Guthrie (1967-71)のものである。また、[ˈ] は H 声調を、[a] は弁別的でない長さを、子音の前の [˘] はその直前の母音が長くなることを示す。[ | ] は、接頭辞と語幹の間の形態素境界をあらわしている。また参考に、本調査で得られたベンデ語形を併記する。[—] は、

<sup>6</sup> 本論では 1, 4, 9 クラスの動詞接頭辞にあたる。

<sup>7</sup> ただし現代ベンデ語の母音は、2章 2.1.1. に述べるように、5母音に減少している。

対応する語が見つからなかったことを示す。

## (5) Guthrie (1967-71: vol.3-4) の C.S. (Comparative Series) とトングウェ語形

C.S.	トングウェ	PB	意味	ベンデ語
0009a	-balɔl-	*-bàdud-	count	—
0122	-βɛk-	*-bík-	put, put away, store	-bhiik-
0136	-fjal-	*-bjád-	bear (child)	-fyaál-
0185	m boʃj	*-búɖj	goat	mbusí
0225	fula	*-búdà	rain	nfulá
0378	-sɔn-	*-còn-	sew	-son-
0403	-sɔl-	*-cúd-	forge	-sul-
0603	ɛ liβa	*-ɖj̀bà	pool, well, deep water	iisibhá
0726	-fwāl-	*dúád-	wear	-fwaál-
0771	ɛ yāmbò	*-gàmbò	affair	iighámbo
0842	moyolo	*-gòdò	evening	múghóló
0941	ʼsɛla	*-jídá	path	nsilá
0943	mā nsj	*-jí	water	mansí
0951	ʼsofɔ	*-jògù	elephant	nsófú
1063	-kɛn-	*-kín-	dance (gambol)	-kin-
1105	-kɔl-	*-kód-	work	-kol-
1144	j kɔndɛ	*-kòndè	banana	iikóndé
1301	-meny-	*-mènj- or *-mèny-	know	-mány-
1536	-hɛt-	*-pít-	pass	-hit-
1584	-hw-	*-pú-	cease	-hu-
1589a	-hɔlək-	*-púɖik-	hear, listen in silence	-hulik-
1701	-tek-	*-ték-	cook, boil	-teék-
1729	sij tɛ	*-tí	tree	sítí
1814a	-toβɔl-	*-túbud-	pierce	-tubhúl-
1948	w āj	*-yátí	grass	bhwasi
2016	-yeŋɛl-	*-yíngid-	come (or go) in	-jingil-
2087a	-yjhay-	*-yìpag-	kill	-jihágh-
2121a	ka nyɔnyj	*-nyò̀nì	bird	kányónyí

Guthrie (1967-71: vol.3, vol.4) のトングウェ語のデータと筆者が調査した現代ベンデ語のデータは次の2点で異なる<sup>8</sup>。

<sup>8</sup> ただし Guthrie (1967-71) のトングウェ語の例には声調を記録していないので、声調の問題はここでは考慮していない。

## 第1章 先行研究

1. 母音体系が7V>5Vに減少. *i, e*は*i*に, *ɥ, ɔ*は*u*に対応する.
2. [C]はその直前の母音を長くする, ということの意味する. トングウェ語の語頭の[C]は, ベンデ語のNCに対応する. (5)の例では, 語頭の鼻音結合の子音が#NC>#Cと弱化し, その痕跡が[C]という形で残っているようである. ベンデ語では, 語頭の鼻音結合の弱化は起こらないが, 同様の弱化現象はベンデ語の南に隣接するFipa語の語頭の鼻音結合にも起こる.

## 2.2. Bryan (1959)

Bryan(1959)は, 基本的にGuthrie(1948)の分類を踏襲しているが, 1つのまとまりを構成することが言語学的に疑う余地のない酷似した諸言語を集めて1語群(Group)と称し, その上部にわたる分類は, 時期尚早であるとして放棄している(清水 1996: 249). Bryan(1959)はベンデ語, トングウェ語をトングウェ・グループとする. なおトングウェ・グループにはFipa語も含まれているが, これは明らかな誤りで, その後の研究では継承されていない. またベンデ, トングウェ語について, 使用地域と1948年の国勢調査に基づく人口を以下のように示している.

## (6) Tongwe Group (1959: 118)

TONGWE

Where spoken: South of the lower Malagarasi river, west of R. Ugalla at their confluence, and westwards to within 30 miles of L. Tanganyika. Number: 7,886 (1948)

BENDE

Where spoken: In a small area about 30 miles from L. Tanganyika, extending to R. Ugalla and R. Uvinza. Number: 6,927(1948). Nothing is known of this language.

2.3. *Ethnologue 15<sup>th</sup> edition* (Gordon ed. 2005)

Gordon ed.(2005)の*Ethnologue 15<sup>th</sup> edition*は, SIL TanzaniaのLiddle and Liddle(1999)の社会言語学的調査報告に基づくものである. *Ethnologue 15<sup>th</sup> edition*でもベンデ, トングウェ語の両方を言語名として立てているが, ベンデ語とトングウェ語が1つの言語の方言である可能性は指摘されている. また, ベンデ語と周辺言語との間の共通語彙の割合はNurse and Philippson(1980: 26-67)のデータに基づくものである. トングウェ語についてあげられている辞書とは, Kakeya and Nishida(1976)の*A Glossary of Sitongwe*を指すという.

(7) *Ethnologue 15<sup>th</sup> edition*BENDE

**Population** 27,000 (1999).

**Region** Rukwa Region, Mpanda District, Kabungu, Karema, and Mwese divisions.

**Alternate names** Kibende, Si'bende

<b>Dialects</b>	Tongwe and Bende may be dialects of one language. Lexical similarity 74% with Sumbwa, 72% with Nyamwezi, 70% with Sukuma Hu, 67% with Ha, 71% with Rundi, 60% with Hangaza, 58% with Nyankore and 65% with Holoholo and 90% with Tongwe.
<b>Classification</b>	Niger-Congo, Atlantic-Congo, Volta-Congo, Benue-Congo, Bantoid, Southern, Narrow Bantu, Central, F, Tongwe (F.10)
<b>Language use</b>	All ages. 55% to 71% of speakers have lower than routine proficiency in Swahili.
<b>Comments</b>	Valley. Deciduous forest. Agriculturalists; hunters. Muslim, Christian, syncretism with traditional religion.

**TONGWE**

<b>Population</b>	13,000 to 15,000 (2001). Ethnic population: 31,551 (2000 WCD).
<b>Region</b>	Within the boundaries of Kigoma District, Kigoma Region. The Tongwe live on the eastern shore of Lake Tanganyika between the villages of Ilagala (N) to Kashagulu (S), boundary between Kigoma and Rukwa regions constitutes the eastern boundary of the Tongwe area. The shore of Lake Tanganyika constitutes the western border. There are also small pockets of Tongwe (up to 20% to 30% of the population) around villages of Uvinza and Nguruka.
<b>Alternate names</b>	Kitongwe, Sitongwe
<b>Dialects</b>	Lexical similarity 83 to 91% with Bende (with different varieties).
<b>Classification</b>	Niger-Congo, Atlantic-Congo, Volta-Congo, Benue-Congo, Bantoid, Southern, Narrow Bantu, Central, F, Tongwe (F.10)
<b>Language use</b>	In the mountains, vigorous all ages, in Kalya and Kashagulu some Swahili, in other areas speakers are over 40. Used mostly at home and also with the Bende. Outside the mountains, speakers are older than 40 years. Attitude testing among speakers indicates a higher prestige of Tongwe variety. Some use of Swahili in high domains.
<b>Language development</b>	Dictionary.
<b>Comments</b>	Lake shore, mountain slope; riveraine. Deciduous forest. 700 to 2,000 meters. Fishermen; agriculturalists: maize, cassava, rice (close to lake shore), millet, peanuts, sweet potatoes. Traditional religion, Muslim.

## 2.4. Legère (1992, 2002)

Legère (1992: 99-116) は, Tanzania の諸民族の人口を 1948 年と 1967 年の国勢調査の数を基に, 人口の伸び率を算出している。ベンデ, トングウェの資料は(8) の通りである。

## 第1章 先行研究

- (8) Legère (1992: 102, 2002: 174-176)  
 Ethnonym figures 1948/1957/1967 (territory; growth 1948/1967 in percent/selective)
- Bende 8,836/7,792/8,269 (Mpanda[Rukwa]; 1967/1948=94%)  
 Tongwe 8,513/8,746/12,851 (Mpanda[Sumbawanga]; 1967/1948=151%)

ベンデの人口が著しく減少し、トングウェの人口の伸びも Tanzania 平均より低いことについて、Legère (2002: 179-180)は、この両言語が消滅の危機に瀕している、と警告している。ただしベンデとトングウェが重複している可能性には言及していない。

## 2.5. Nurse and Philippson (1980)

Nurse and Philippson (1980: 26-67)は、語彙統計による Tanzania の諸言語の分類を試みた。ベンデ語は 100 語の基礎語彙を用いて、周辺言語との語彙統計的比較を行った (Nurse and Philippson 1980: 65-66)。その結果、Nurse は既存の分類には拠らず、共通語彙率の高さからベンデ語を West Tanzania 諸語と分類した。すなわち、ベンデ語と West Tanzania 諸語全体との一致率が 72%、West Highlands 諸語全体との一致率が 66%という結果から、ベンデ語を West Tanzania 諸語としたのである。トングウェ語については触れられていない。

- (9) ベンデ語と周辺言語の共通語彙の一致率 (Nurse and Philippson 1980: 65-66)

言語名	(%)
Sumbwa	74
Nyamwezi	72
Sukuma Hu	70
Ha	67
Rundi	71
Hangaza	60
Nyankore	58
Holoholo	65

すなわち、ベンデ語に最も近いのは Sumbwa 語、次に Nyamwezi 語という結果である。ベンデ語が属する West Tanzania 諸語には、(10)の言語が含まれる。

- (10) West Tanzania 諸語  
 Sumbwa, Sukuma, Nyamwezi, Nyaturu, Nilyamba, Isanzu, Nyambi

ただし、West Tanzania 諸語と Vinza 語などを含む West Highlands 諸語との差は、それほど大きくないため West Highlands 諸語との関係も無視できないという指摘もしている。



Bende is part of W. Tanzania (but lacking data from further west), and apparently closest to Sumbwa, but the division is not so clear as, e.g. with Vinza. Figures for groups other than W. Tanzania are also high, probably indicating a degree of interference; Sumbwa is very interfered with. (Nurse and Philippson 1980: 66)

## 2.6. Nurse (1988, 1999)

Nurse (1988: 15-115) は, Nurse and Philippson (1980) で行った語彙統計における共通語彙のみでなく, 歴史音韻変化の面から, Southern West Tanzania 諸語の分類を試みた. トングウェ, ベンデ語の特徴は, 以下のように述べられている.

### (11) xiii. Tongwe/Bende (Nurse 1988: 58-59)

Tongwe and Bende are extremely similar to each other and are collectively characterised by:

- the shift of /p/ to /h/: also in Sumbwe, Vinza, Holoholo, Ruvu
- spirant-devoicing: also in Nyakyusa/Ndali, ?Holoholo, SH, Rufiji
- Class 5 /li-/ reduction: also in Nyika, Mwika, WT, Nyakyusa/Ndali, NECB<sup>9</sup>
- loss of preprefix: also in Rufiji, Kilombero, Subwe, Holoholo
- palatalisation of /k/g/ to /s/j/: similar but not identical in Mwika/Nyika

しかしトングウェ, ベンデ語のこれらの特徴すべて, あるいはその大部分を共有する言語群はないという. トングウェ, ベンデ語の特徴は, 地理的に近い Pimbwe, Lungu 語からも逸脱しているし, 北, 西に位置する Vinza, Holoholo 語とも近くない. Sumbwa 語を除いては, West Tanzania 諸語とも共通していないという. したがってトングウェ, ベンデ語が West Tanzania 諸語とは異なる可能性をあげている.

Nurse (1999: 10) は Nurse (1988: 15-115) 同様, トングウェ, ベンデ語は主な W. Tanzania 諸語, あるいは周辺の言語とは決定的な特徴において異なり, トングウェ, ベンデ語の帰属は明らかでないことを指摘している.

---

<sup>9</sup> North East Central Bantu.